

房総の伝承音楽

笹嶋眞夫

Folk Music of Bōsō

Masao SASAGIMA

[千葉県民謡「海に生きる人々・山や里に生きる人々の歌」]のvideoの企画制作は、千葉県教育委員会・千葉県立房総の村、製作は民族文化映像研究所に寄るものである。

房総の地域での集まりの折に発表が出来ないかとの話があり、譜面に取っておけば、役に立つであろうと引き受け採譜したものである。

メリスマ唱法（母音を繋げて歌う）で、大勢が思ったところで自由に切って歌う、仕事歌、例えば、地引き網を引ながら歌うと、息が切れてくると、歌っている間に調性が微妙に変わって来たり、たった一人でも強い声の者がいると、すぐに、その流れに移っていく。曲の流れから、こうあるべきが正しいのか、あくまでも、専門作曲法から見ると明らかに不思議な進行ではあるが、非常に面白い進行を示したりもする。大人が指導の形で歌ったものでも、子供たちはつかず離れずの歌唱から、かなりの変化した歌い方に変えていく。僅かな時間の間にある。大人たちの歌唱にはかなりのコブシが入り込んでいるのだが、子供たちは、それを難なく剥ぎ取って歌い、余り音程の幅を広げず、戸惑いながらも適当に節を変えていっているのだと解釈する。私が幼い時に、母から教えて貰った、手振りも含めた童歌が、ある会合の席で披露した時、何人もの人から、歌詞の違い、振りの違いを指摘されたり、授業の折に生徒から、かなり変わった歌い方、手振りを習い、出身地の違いなどから、ひとつの音楽も時が移り、人が変わり、場所が移って、多種多様に立ち立っていくのだと感心した。源泉がどうあれ、しっかりとその土地に根付き、独自の歌唱がまた生まれつつ、夫々の心に懐かしい郷愁感を与えてくれるならば、それで良しと思う。

このvideoを見ながら、少しばかり憂いたのは、若者の欠如である。画面に出てくるのは老人（失礼）と子供たちだけであった。海辺では昔の大漁を懐かしみ、農村ではこの企画によって、村の長老が、思い出を辿り、再現する。採録の時期にもよるのであろう。正月、盆、祭り

の時はかなりの若者たちも郷里に戻る。是非、次回は老いも若きも混じった、賑やかな映像を期待したい。今回、採譜したのは、九十九里片貝の地曳歌、館山、相浜の地曳の木遣りの二曲と、山間部の睦沢町、佐貫の年中行事の中の四曲である。

1. 海に生きる人々の歌より、片貝地曳歌

一人のかけ声で網を引く準備をする。この曲はほぼ実音から取った。終了時には半音近く上がっていた。多分、息（意気も）が上がってきたのであろう。かけ声の部分は夫々まぢまぢの声を出しているのだが、祭りの神輿担ぎの乗りが感ぜられたので、三部に分け、上声部を半音階上昇にして盛り上げて見た。この収録では十番まで歌われていたが、後半になると、かなりきわどい内容になってくるので、カットさせていただいた。しかし、大らかな雰囲気、さっぱりした表現、文章をそのまま読むのとは違い、歌うことによって土地の人々の開放的な心情を感じることが出来、大変好ましく思えた。網を引く準備を、のんびりとした歌唱で間を十分に取り、紐を網に引っ掛け、一気に引いていく、イヤッサーとハアの合いの手が絶妙に入り、自然な緩急でとことん働き、休み、十分に力を蓄えてからかけ声と共に全員の力を引き立たせ、また働かせる。絶妙なタイミングと言えよう。長いブランクを感じさせない、映像に見る足の揃い具合は若々しく、実に無駄がない。

ハイ 出来ました、立派なもんだよ イヤッサー 若い衆、頼むぞや
ア－イ どうだ イヤッサー イヤッサー

1. 二十や三十 ハア こよりは嫌だ ハア でっかい よりと来たら ハア
マルキチの物だ ハア みっしり取らせろ エー イヤッサー
2. 千も二千も ハア また来る 三千も ハア 取らせたいのかよ ハア
マルキチ網だ ハア みっしり取らせろ エー
3. どうだ ハア 若い衆 ハア おろそうじゃないか ハア 沖はとりやまだ ハア
大鯛に大背黒 ハア 鯨 鯖 カマスだ エー イヤッサー
4. マルキチ大漁だ ハア 皆さんも御存じ ハア 暮れのご勘定 ハア
百万両と決まった ソラ 決まったぞ エー

海に生きる人の歌

九十九里片貝地曳歌

採譜・編曲 延嶋真夫

ハーアイできました リはなもんだよ イッサー イッサー イッサー イーアー

わかいしゅうのむぞや アイどうだ イッサー イッサー イッサー イッサー イッサー イッサー

にじゅう-や-さんじゅう (二十) (三十) こよりは-いぬだハア ぢかいよりとぎたらハア マルキタのむ-のだハア

みしりとせろエー イッサー イッサー イッサー イッサー イッサー イッサー (四) (三十四)

またくる-ごぜんむハア とらせたいのかよハア マルキタ-あみだハア みしりとせろエー (三十四) (編)

どうだハアわかいしゅうハア おろそか-ないかハア おきはとりやまだハア 大いわし-大せごろハア (沖)

アヂサバ-カマスエー イッサー イッサー イッサー イッサー イッサー イッサー マルキタ-たいしゅうだハア

みなさんもごもんじハア くれの-ご-かんじゅうハア ひやくまんときまつたツラ さまたぞえエ (暮) (勘定) (百萬両) D.C.

2. 海に生きる人々の歌より、館山・相浜

地曳の木遣り

ソーリャーエー 揃た揃たよ 綱子が揃た、と一人がコブシを利かせて、朗々と歌うと、全員が同様にのんびりと、アラ 良いとね、と応唱する。全員の足腰が揃うやいなや、ヤッタ、ヤッタ、ヤッタ、と凄じい勢いで一気に上りつめていく。その緩急が激しいので、かなり疲れるものと思われる。採譜の際、ほぼ一オクターブ上げて見た。ここは、どうしても先導者として相馬盆唄、馬子唄のような民謡に見られる高い声が必要だと思ったからである。多分長年の歌唱、または潮風などで、声が低くなってしまったのかも知れない。しかし、それはそれとして、聞きごたえのある木遣りであったことは言うまでもない。山間の静寂の中での朗唱であるならば、筈も返るであろうし、十分に響く中での声帯は更に美声を生み、高音部を楽にしてくれる筈だが、なにせ潮騒の中での声は出て行くばかりで戻ることがないからである。二手に分かれた引き手が一拍づつ、ヤッタ、ヤッタ、ヤッタと掛け合う。そして不協和音で八拍、最後の拍で一瞬止まる。その一瞬の静寂が誠に小気味よい。声だけでなく、映像においても、前の曲同様に、調和の美が感じられる。一人の女性がとことん歌い、かけ声のあと、思わず、ホー、ホー、きついなーと、ため息と共に言っていたのが、とても印象的であったので、曲の間に挿入して見た。

1. そりゃーえー 揃た揃たよ 綱子が揃た アラ良いとね ヤッタ ヤッタ
2. " 唄でご器量が下がりゃせぬ アラ良いとね ヤッタ ヤッタ
3. " 鯛と平目が山となる アラ良いとね ヤッタ ヤッタ
4. " 富士の白雪、朝日に溶ける アラ良いとね ヤッタ ヤッタ
5. " 沖のマネ見ろ万両旗 上げようじゃないか アラ良いとね ヤッタ
6. " 今日は皆さん揃って一緒 アラ良いとね

館山相決 地曳の木遣

採譜 笠嶋真夫
編曲

Solo.

1. そら - りゃ - - - え - - - - - そろく - そろたよ つたこ - - - がそろた
 2. うたで - ごきりやが こがりゃ - - - せ - む
 3. タイヒ - ひらめが やまヒ - - - な - る
 4. ぶじの - りんき あさひ - - - に とける

アア
アラよ - - - いと ね

ホ - ホ - ホ - そつた (きつた) - そら - りゃ - - - え

あきの - マネみろ まりり - - - は - 夫 あげよじりな い - か、アラよ - - - いと

ね

そら - りゃ - - - え - - - - - まうは - みんさん そろて - - - い - つは

アラよ - - - いと ね

ごきりよ = ご器量

1. 山や里に生きる人々の歌 年中行事の歌

睦沢町佐貫 正月の歌

松崎利夫氏が子供の頃に歌ったという正月の歌

ハアー 正月はいいもんだ、いいもんだ、
木葉のような餅食って、雪のような飯食って、ハア
正月はいいもんだ、いいもんだ。

これは一人語りのようなところがあり、親戚の家で年に一度の大盤振る舞いに、喜び歌う子供の姿を彷彿とさせる。

上総、山間部で伝承

ハウジャリの歌（鳥追いの歌）

正月4日に年当番に当たるものが、藁を束ねて三十センチ程に切った両端を編んだ藁紐で括り、その間に松葉など、縁起物を差し込んだものを作り、子供たちに持たせ、村中の家々を一軒ずつ回る。そして、それと引き替えに米や餅、ご祝儀などを貰う。子供たちは年当番の家に戻ると、貰った材料で料理を作って、それを食する。

ハウジャリ棒（拍子木状のもの）を叩きながら歌う。

ハウジャリ出来ました。おめでとうございます。

ハウジャリごっこ、ホジャラの晩に、茶筌がなくて、松葉を揃えてお茶たてろ、
お茶立てながら口聞くな、なぜ馬場じゃお茶立てね、ねんねこが（赤ん坊）
霜けて（霜焼けが出来て）お茶立てね。

炉端で、ハウジャリ棒をカチカチ鳴らしながら歌うのだが、a mollで歌われていたのを、d mollに上げて見た。リズム楽器としてのハウジャリ棒の乾いた音の響きと、言葉遊びのゴロの良さが、浮き浮きした雰囲気をもよく出している。

山や里に生きる人々の歌 年中行事の歌
睦米町佐賀の歌 正月の歌

伝承 松崎判夫
採譜 蛸嶋真夫
編曲

ハア - ア しょうがっぱいもんた ハア いもんた いもんた おぼじのこころへおぼれて アラッのおな-さげのんで”
(漆) (餅はめて) (油) (酒)

こっぴいおな-ちかいて ゆきの おな-マヌくてハア しょうがっぱいもんた ハア いもんた いもんた”
(木葉) (餅) (雪) (正月)

上総・山間部で伝承 ホウジリの歌 佐賀子供会(鳥起いの歌) 正月4日に葉で作成供之物
ホウジリ棒(拍子木状)を叩きながら歌う を家々へ廻り餅などを賣り料理して食す。

曲終了まで鳴らし続ける

ホウジリできました おめでとう じがります

ホウジリ ジン ホウジラのぼんに ちせんがなくマ マツバをそろえて
(茶筌) (松葉)

おちたてろ おちたてながら くらまくな な せ”は”は”じ”
(馬場) 地帯

おちたてね ねんね”が”し”も”けて おちたてね
(赤子) (霜焼け)

雛様呼ばり (三月三日)

長南町で作られた人形 (いろいろな人形の木の型に捏ねた土を入れ、乾かした人形に彩色して飾る。雛人形、犬、猫、鳥、相撲取り、などの人形を桃の木の下に箆を敷く、女子のみの祭りではなく、男子も一緒に参加する。菱餅や甘酒なども飾り、お参りしてから、歌う。

お雛様よ、来年もござれ、来年の節句には、桃の花あげよ、

酒こうて (買って) しんぜよ。

餅ついてしんぜよ。

風に乗って、雲に乗って、早よ 早よ おいで。

アクセントの問題や、旋律の流れなど、原曲とはかなりの違いが出来てきていることを感じさせる。videoでは六度も低い音から始まっているので、後半には調性がやや上がったかしていたので、無難な曲の流れに納めた、最後の二小節はもしかすると、呼びかけで五度高いCの音から歌っていたこともあるように思う。でも音の起伏が狭いことで、誰もが口ずさめるという利点もあることはある。

凧あげの歌 (端午の節句) 五月五日

前半の、凧、凧、上がれ、天まで上がれ、は現在も、この箇所のみ繰り返されて歌われていると思われる。後半の、山姥、風寄せ、寄せ、は聞いたことがなく、もしかすると、いろいろな言い回しで、他にも風を呼ぶ歌詞があるのだろう。実に楽しい凧揚げである。

videoでは子供たちの歌声と大人の歌声を聞くことができたが、圧倒的に大人の歌唱の方が音程も高く取れ、リズム感に溢れ、説得力があった。

たこたこ上がれ 天まで上がれ

やまんば やまんば かぜ よせ よせよせ

雛様呼びはり 子供達の歌う原曲はこのような旋律か

作曲 笹嶋真夫

おひなさまよ らいぬもござれ らいぬのせくには もものはなあげよ さけらてしぜよ
もちらてしぜよ わせにのて くもにのて はよはよ おいで

雛様呼びはり コブシを利かせた曲 (自由に歌う為に小節線は加えない)

作曲 笹嶋真夫

おひな --- さ --- まよ --- ら --- いぬ --- も --- ご --- ざ --- れ ---
ら --- いぬ --- の --- せ --- く --- に --- は ---
も --- も --- は --- な --- あ --- げ --- よ --- さ --- け --- ら --- て --- し --- ぜ --- よ --- も --- ち --- ら --- て --- し --- ぜ --- よ ---
わ --- せ --- よ --- か --- せ --- に --- の --- て --- く --- も --- に --- の ---
て --- エ --- は --- よ --- は --- よ --- お --- お --- い --- て ---

雛様呼びはり 現代だったらこのような曲に、二部合唱

作曲 笹嶋真夫

おひなさまよ らいぬもござれ らいぬのせくには モモのはなあげよ さけらてしぜよ
もちらてしぜよ わせにのて くもにのて はよはよ おいで

この雛様呼ばりを見ると、童歌の原点が見えてくる。お祝いの言葉を人形に向かって語りかけるわけだが、

御雛様（一拍）よ（一拍）来年も（一拍）ござれ（一拍）来年（一拍）の（一拍）
節句に（一拍）は（一拍）桃の（一拍）花（一拍）あげ（一拍）よ（一拍）
酒（一拍）こうて（一拍）しんぜ（一拍）よ（一拍）餅（一拍）ついて（一拍）
しんぜ（一拍）よ（一拍）風に（一拍）乗って（一拍）雲に（一拍）乗って（一拍）
はよ（一拍）はよ（一拍）おい（一拍）で（一拍）

以上のような語りかけを繰り返していくうちに、オヒーナサマヨ、ラーイネンモ、ゴザレ、のようにリズム感が生まれ、それに付随して抑揚がついていった。旋律の誕生である。口承音楽であるゆえに、確固たる曲とはならない。非常にコブシを聞かせた時もあっただろうし、単純極まりない曲になってしまった時もあるだろう。この曲の場合、名調子で歌われたものと比べると、ほぼ中間地点にあるように思われる、一応、子供たちが歌って来たわけだから、子供らしい曲に、そして大人が歌うコブシを聞かせた曲、更に個人的に手を加えた雛様呼ばりを作って見た。

雛様呼ばり
(3月3日)

長南町で作られた土人形(色付けた水雛人形)を男の子の
揃った原に庭を敷き、人形を飾り、歌い食す。

採譜・編曲 笹嶋真夫

おひなさまよ らいぬもござれ らいぬのせくには もものはなあげよ
 さけこつてしぜよ もちついてしぜよ かぜにのつて くもにのつて
 (酒買って) (餅)
 はよはよ おいで
 (早く)

5月5日 端午の節句 凧あげの歌

採譜・編曲 笹嶋真夫

たこたこ あがれ てんまで あがれ
 やまはばやまはば かぜよせ よせよせ
 (山姥) (風) (寄せ)

後書き

この video を一通り見て、非常に感銘を受けた、地域の生活に根づいた音楽、遊び歌、年中行事、そして仕事歌、その仕事歌にしても、実に無駄がない。コブシを利かせ、のんびりした様子に見せながら、十分に力を温存させておく為の、間（ま）であり、その間は次の仕事にかかる為の最低限必要なだけの時間の中で組み込まれたものなのだ。地曳きも最盛期の、それも冬場での様子を聞くと、それにもか弱い筈の女子、子供が手足を凍えさせながら踏ん張ったのだ。時代もそうだったのであろうが、黙って網を引くのではなく、先導者の朗々とした歌いぶりがあり、かけ声がかかり、頑張れたのだろう。気候の良い時期での朗詠は、更に磨きがかかった。私も幼い頃、早朝の九十九里浜での地曳きを何度か目にし、その格好の良さに、元気の良さに、そして見学者にも沢山の魚を分けてくれた気前の良さに、すっかり嬉しくなってしまう覚えがまざまざと脳裏に甦ってくる。近年遠洋漁業に代わり、地曳きも観光化して来ているようだが、是非、その際も歌入りでと願う。他の収録に長寿を祝う歌、麦突き歌なども大変興味を持ったが、言葉が聞き取れなく、テロップにも出ず、残念な思いがした。特に、祝歌の場合、メリスマ歌唱が夫々がまちまちで非常に面白い。また、間の口上の内容も更に興味を引いた。時間を見て、確り、とり直して見たい、子供たちの歌い方に関しては、慣れていないこと、カメラを意識してか、余り元気がなく、地域の音楽、国語教育で確り、学ばせる必要があると思った。朗読や体を使ってのリズム感を養えば、かなりの成果が上がると思う。ともあれ、この機会を持ったことで、大変多くの事を学ばせていただいた。折をみて更に色々な地域に波及させて行きたいと思う。

1999年（平成11年）8月31日

笹嶋 眞夫